

前者はエゾオオヤマハコベ節に属するに反し、後者はサワハコベ（花柄有毛のアリサンハコベ型）であることを確認した。狭義のサワハコベは花柄が無毛（稀に散毛あり）である。

貴州、湖南産植物は共にアリサンハコベ型であり、従って形態的には 2 群に、地理的には 3 地域（西南シナ、台湾島、日本列島）に分れて存することになった。此の事実を現世の生態環境から見れば、西南シナと台湾島とが暖温帯から亜熱帯植生の地となり、日本列島が暖温帯から冷温帯植生の地となる。これに地史を考え併せれば、サワハコベ（アリサンハコベを含む意の）は亜熱帯植生の西南シナに多分誕生した種であり、而もそれは第三紀鮮新世の前期或は更に前だったのではあるまいか？ 此の頃には既に琉球列島は大陸から分離していたであろうから、本種は伝播し得なかった。山地伝いの東～東北漸をしたサワハコベが大陸縁に到達した後、洪積世前期に日本列島が成立し、末期にやっと台湾島が分離した。此の洪積世の間約 50 万年に、シナ北半の乾燥化によってサワハコベは絶滅し、海洋気候に保護されて日本型のサワハコベが形成されて来たと想像する。台湾山地のものは島の形成が最も新しく、亜熱帯植生の下に旧来の環境条件を満足させられつゝ、祖型アリサンハコベとして残っているのではあるまいか？ 即ち現在の 3 分布地域はそれぞれ過去の分布域の拡がりを示す化石地域であると言えようし、アリサンハコベから日本のサワハコベが漸次分化するのに約 50 万年を要したと推定することが出来るのではあるまいか。

# ○地衣類思い出話 (8) (富樫 誠) Makoto TOGASHI: Miscellaneous notes on lichens or lichenological survey (8)

日本地衣中の一稀品であるヤイトゴケの一種が Faurie によってこゝで採集されて以来、剣山からは何も珍種がでて居ない。そこで筆者は剣山を水源地とする那賀川の上流沢谷村岩倉迄足を伸ばした。この附近で *Cladonia Krempelhuberi* Vain. var. *sublepidota* Asah. と覚しき標本を沢山採集して朝比奈先生に提出して置いた所、暫くして先生はその中から *Cladonia shikokiana* Asah. と命名された新種を分離された。これはその外形が *Cl. Krempelhuberi* var. *sublepidota* に酷似して居り、ザット見たのでは中々区別がつかない。然し、よく見ると *Cl. shikokiana* の方は同長二分岐がハッキリして居る。そしてもっと他所にも出そうな気がする。この沢谷村附近の採集は昭和 31 年と 32 年と連続して挙行し、昭和 32 年には葉体膠質、黒緑色の葉状地衣を採集して先生に提出した所、これは *Pyrenopsidaceae* のもので *Thyrea latissima* と云う名ができた。此珍物については吉村君の新説が本号 (356 頁) に発表されている。